

中島敦「弟子」論

——師弟愛について——

松村良

はじめに

「弟子」は、一九四二（昭和一七）年二月四日に中島敦が没した後、翌年の「中央公論」二月号に掲載された。その草稿「子路」の末尾には「昭和十七年六月二十四日夜十一時」の記載があり、半年以上前に脱稿していたことがわかる。また、浄書原稿「弟子」の題名の部分には、「師弟」から変更された痕跡がある。このことから「子路」↓「師弟」↓「弟子」と、タイトルが変わっていった様子がうかがえる^{注1}。

「弟子」は「李陵」と並んで中島敦の代表作と呼ぶべきテキストである。篠田一士は「弟子」と「李陵」をのぞいたら中島敦の作品のなかでなにが残るだろうか。つまり彼はただふたつの作品によって記憶される作家なのである^{注2}と述べている。

そしてこの「ふたつの作品」が、複数の登場人物の「対比的関係性」を主眼としていることは、既に勝又浩によって指摘されている^{注3}。

問題はその関係性の違いであろう。「李陵」には見られない「弟子」独自の「対比的関係性」とは、孔子と子路との「師弟愛」に他ならない。本論は、この「師弟愛」を軸として「弟子」を読み直し、孔子と子路の愛情が互いの〈違い〉に基づくものであることを明らかにしたい。

一、孔子一門の発展史としての「弟子」

「弟子」は、「游侠の徒」であった子路が孔子に入門してから、「孔門随一の快男児」としてその名が天下に響き、衛の政変に巻き込まれて憤死するまでの生涯を描くと同時に、孔子一門が名声を得ていく発展史としての内容を含んでいる。本田孔明は次のように述べている。

子路は孔門の徒でありながら、儒教という一つのイデオロギーと彼の「自己」とが抵触する地点では、イデオロギーに「自己」が回収されてしまうことを執拗に避け続けるの

である。^{注4}

確かに(五)——以下括弧内の漢数字は章を示す——で語られるように、子路の「自己」には「師にも尚触れることを許さぬ胸中の奥所」があり、その「単純な倫理観」は生涯変わることはなかったのであるが、同時に子路は、「孔門の徒」であることに誇りを持ち、儒教イデオロギーに感化されていた部分も多分に見られるのである。まず、そこを確認しておきたい。

後年の孔子の長い放浪の艱苦を通じて、子路程欣然として従った者は無い。それは、孔子の弟子たることによつて仕官の途を求めようとするのでもなく、又、滑稽なことに、師の傍に在つて己の才徳を磨かうとするのでさへもなかった。死に至る迄渝らなかつた・極端に求むる所の無い・純粹な敬愛の情だけが、此の男を師の傍に引留めたのである。(二)

他の弟子達が、自分が「孔子の弟子」であることに何らかの「利用価値」を求めていたのに対し、子路は「精神的支柱」としての師だけを求め続けたと(二)では語られている。だが、物語が進むにつれ、「孔子の推挙で子路は魯国の内閣書記官長とも言ふべき季氏の宰」となり、「孔子の内政改革案の実行者として真先に活動」するようになる。

自分の仕事の結果が直ぐにはつきりと現れて来る。しかも今迄の経験には無かつた程の大きい規模で現れて来ることは、子路の様な人間にとつて確かに愉快に違ひなかつた。殊に、既成政治家の張り廻らした奸悪な組織や習慣を

一つ／＼破砕して行くことは、子路に、今迄知らなかつた一種の生甲斐を感じさせる。多年の抱負の実現に生々と忙しげな孔子の顔を見るのも、流石に嬉しい。孔子の目にも、弟子の一人としてではなく一個の実行力ある政治家としての子路の姿が頼もしいものに映つた。(六)

孔子一門の塾頭格である子路が、孔子の推挙によつて「内政改革案の実行者」となることは不思議ではない。その経験を通して子路は、そこに「愉快」と「生甲斐」を見出す。この時、結果的に子路は「孔門の徒」であることの「利用価値」を知る。たとえ「孔子を上戴着といつた特別な条件が絶対に必要」(八)ではあつても、彼自身が「孔門の徒」としての自分が政治的・社会的に有用な人材であることを自覚したこの意味は大きい。子路は既に「游侠の徒」ではないのだ。本田は、「つまり子路の倫理感、もつといえは子路の「自己」とは、彼が孔子の門に入る以前から定立しており、師の教えを受けることと四十年にしてなお、変わらなかつたへものゝのである」^{注5}と述べているが、その部分だけが子路の「自己」だとは言ひ切れないのではないか。逆に言えば、子路は四十年の「師の教え」によつて、「際立つた馴らし難さ」を持つ「自己」の多くの部分を変えてきたのである。

例えば(四)で「瑟の音」の「殺伐な北声」を孔子に批判され、「瘦せ細る迄苦しんで考へ込んだ」子路の姿は、「孔門の徒」としての「自己」を必死に確立しようとしていたのである、それが(十三)の末尾で語られる「圭角がとれたとは称し

難いながら、流石に人間の重みも加はつた」「瘦浪人の徒らなる誇負から離れて、既に堂々たる一家の風格を備へて来た」姿へとつながるのではないか。孔子一行が魯の国を立ち去り、諸国遍歴を始めたばかりの（七）の段階では、子路は「天は何を見てゐるのだ」と嘆き、「天下の為ではなく孔子一人の為」に泣く。それが諸国遍歴を重ね、師と共に数々の苦難を乗り越えることにより、（十三）においては「漠然とながら、孔子及びそれに従ふ自分等の運命の意味が判りかけて」来るのであつた。

（十四）では、「精神的支柱」としての孔子と別れて衛に留まり、「宰として蒲の地を治める」子路の姿が描かれる。その時に「蒲の壮士連を推服せしめたもの」の一つは、「孔門随一の快男児」としての子路の評判であつたと語られる。そして三年後に孔子が蒲の地を訪れた時に「子路を見ずにして之を褒め」たのは、^{（注）}「儒者」としての彼の統治能力に對してであつた。この時、子路は紛れもなく孔子一門の発展史の中に組み込まれ、その一翼を担う存在になつていたのである。だからこそ（十五）において、昔と変わらぬ子路の言動や、孔子の「ただ形を完うする」行為への違和感が語られることの意味があるのであり、この両面を合わせたものがこの時点での子路の「自己」なのである。

このように考えれば、（十六）で子路が敢えて衛の政変に関わり、「全身膂の如くに切り刻まれて」死ぬ直前に、落ちた冠を拾つて素早く纓を結び、「見よ！ 君子は、冠を、正しうし

て、死ぬものだぞ！」と絶叫するのは、矛盾している訳ではないことが分かる筈だ。子路自身は「孔門の徒」として死ぬことを自覺していたのであり、同時に、「孔家の禄を喰む身」としての自分が、主人の孔悝の為に命を捧げることは当然だと思つていたのである。この時子路は、両面を合わせた「自己」を同時に実現する形で死を選んだと言えよう。

従来の論者、例えば奥野政元が「纓を結ぶ行為は、形を正す孔子の教えに貫かれたものであるが、だとすれば、これは子路の自己否定にも近い行為である」「子路の死に様は一種無ほうな大死でもある。そのような死は、孔子の教えとはむしろ対立するものであるが、しかも死ぬ間際には孔子の教えに従う意味の言葉と行為を残している」こと^{（注）}から、これを矛盾と捉えるのは、子路はもともと根源的に「孔子の教え」と対立する存在であり、にもかかわらず最期に「形」の上で「孔子の教え」を守ろうとした、という見方に基づくのであろう。子路が孔子一門の発展史の中で感化され、^{（注）}「儒者」としての「自己」を形成してきたことは既に述べた。すると問題は、子路が根源的に「孔子の教え」と対立する存在なのか、あるいは、そもそも孔子と子路とはどのような「師弟」関係だったのか、ということになる。章を改めて考えてみたい。

二、孔子と子路との「師弟愛」

子路が孔子と出会い、孔子の弟子となることによって、両者

の間に「師弟愛」が育まれていくが、それは子路の「孔門の徒」への感化とは異なる方向性を持っている。

まず(一)で、子路と対面した孔子は「思はずニコリとした」とある。それは子路の「声や態度の中に、余りに稚氣満々たる誇負を見たから」であり、同時に「何処か、愛すべき素直さが自づと現れてゐるやうに思はれ」たからだった。この、漢文脈を逸脱した「思はずニコリとした」という表現は、ここでの若き孔子が、肉体を持った一人の人物であることを示している。さらに、「学の必要を説き始め」た孔子の姿は次のように語られている。

後世に残された語録の字面などからは到底想像も出来ぬ・極めて説得的な弁舌を、孔子は有つてゐた。言葉の内容容ばかりでなく、其の穏かな音声・抑揚の中にも、それを語る時の極めて確信に充ちた態度の中にも、どうしても聴者を説得せずにはおかないものがある。

このような実体的な存在としての若き孔子に、子路は圧倒され、魅了されたのである。(二)で子路は「ただ其処に孔子といふ人間が存在するといふだけで充分なのだ」と思い、「すっかり心酔して」しまふ。つまり子路の「純粹な敬愛の情」は、実体的な孔子の存在感そのものから発生している。子路が「孔門の徒」としての学問を学ぶことと、孔子に対して「純粹な敬愛の情」を抱くこととは、必ずしもイコールではない。そして彼の孔子への「心酔」は、その対象となる相手に「利用価値」を求めない「没利害的」なものであった。「孔門の徒」として

次第に感化されていく子路とは対照的に、子路の内面における「師弟愛」は、「仕官の途を求めよう」とも「師の傍に在つて己の才徳を磨かう」とも思わず、ただ孔子に「欣然として従う」ことを良しとしたのである。

これに対して、孔子は「此の弟子の際立つた馴らし難さ」に驚きながらも、同時に子路の「純粹な没利害性」(傍点原文)を「無類の美点」として「誰よりも高く買つてゐる」。「孔門の徒」として学問を学ぶにあたつては「欠点だらけ」であつても、この「没利害性」という「孔子以外の誰からも徳としては認められない」「一種の不可解な愚かさ」ゆえに、孔子は子路を弟子として愛するのだ。このように、「没利害性」を軸にしてこの師弟は結びついている。

そして「没利害性」が軸になっているがゆえに、子路は容易に孔子の「感化」を受けつけない。(二)で子路は「形からはひつて行くといふ筋道を容易に受けつけない」男として語られているが、それは子路が孔子を「これ／＼の役に立つから偉い」という「利用価値」の外に在る存在と認めていることと表裏の關係にある。なぜなら、「形からはひつて行く」という行為は、その形式を守ることが何らかの「利用価値」に結びついているか、もしくは形式を守ること自体が目的化されているのであり、「没利害的」ではないからだ。後に(十五)で語られている「無駄とは知りつつも一応は言はねばならぬ」孔子の行いを、「夫子のした事は、ただ形を完うする為に過ぎなかつたのか」と思い、顔を曇らせる子路の姿は、その証左である。な

まじ「没利害性」という「無類の美点」があるために、子路という弟子は、師の教えの究極にある「仁」や「中庸」に到達することが出来ない。

このような子路を、孔子はどのように教え導いたのか。(五)では子路の「没利害性」の根源としての「快感の一種の様なもの」が語られる。「此の単純な倫理観を補強するやうなものばかり」を「感化」として受け入れる子路に対して、孔子は次のように対処する。

孔子も初めは此の角を矯めようとしなくてはなかつたが、後には諦めて止めて了つた。兎に角、これはこれで一匹の見事な牛には違ひないのだから。策を必要とする弟子もあれば、手綱を必要とする弟子もある。容易な手綱では抑へられさうもない子路の性格的欠点、実は同時に却つて大いに用ふるに足るものであることを知り、子路には大體の方向の指示さへ与へればよいのだと考へてゐた。(中略)結局は、個人としての子路に対してよりも、いはば塾頭格としての子路に向つての叱言である場合が多かつた。子路といふ特殊な個人に在つては却つて魅力となり得るものが、他の門生一般に就いては概ね害となることが多いからである。

ここで孔子は子路に対する指導方針として、「塾頭格としての子路に向つての叱言」は言うが、基本的には「大體の方向の指示さへ与へればよいのだ」と考へている。これは「孔門の徒」としての自覺を持たせつつ、「没利害性」そのものは否定

しないということであらう。また、「子路といふ特殊な個人に在つては却つて魅力となり得るものが、他の門生一般に就いては概ね害となることが多い」とあることから、この指導方針があくまで特殊な、子路に対してのみの方針であることも明らかだ。つまり孔子は自分と子路との「違い」を認め、その「違い」を拡大するやうな形で(「これはこれで一匹の見事な牛には違ひない」、この弟子を育てていこうとしているのだ。子路が理解するのは孔子の教えの一面に過ぎず、それは子路の「性格的欠点」だと認めているのであるが、同時にそれが子路自身の「没利害性」という「無類の美点」に基づいていることも孔子は理解している。その美点を愛するがゆえに、孔子は子路を言わば特別扱いしたのである。欠点と長所の根源が等しい子路を教え導くには、それしかなかったのであり、それゆえに子路は「相当敏腕な実家と隣り合つて住んでゐる大きな子供が、何時迄たつても一向老成しさうもない」という「偏り」を持つた存在にならざるを得ない。だがそれは子路だけの責任ではない。そのやうな「没利害性」という「孔子以外の誰からも徳としては認められない」「一種の不可解な愚かさ」を、「無類の美点」として愛した孔子自身の責任でもある。つまり孔子は、自分が求める究極の方向性とは違つた方向性を持つこの子路という弟子を、その「偏り」ゆえに愛したということが出来よう。そのためこの師弟には、お互いに自己の信条とは異なる部分を相手に認め、その部分を愛するがゆえに、自己の信条との矛盾を許容せねばならないという側面がある。

たとえば（七）で、語り手は子路が「子供の時からの疑問」

である「邪が榮えて正が虐げられるといふありきたりの事実について」、「天は何を見てゐるのだ」と憤慨する姿を語る。自分の利害とは無関係に「誰が見ても文句の無い・はつきりした形の善報が義人の上に来る」ことを望んでいる点で、これも子路の「没利害性」であり、「大きな子供」としての「自己」のあり方を示している。その一方で、「天に就いての此の不滿を、彼は何よりも師の運命に就いて感じる」のであり、ここで「天下の為ではなく孔子一人の為」に泣く子路の姿は、言わば「自己」を孔子にまで拡張し、その「自己」の不運を嘆き、天に向つて「反抗」せずにはいられないのである。山下真史は子路と孔子の「自己」について、次のように述べている。

『弟子』で言えば、子路は「自己」を孔子にまで拡大した人間として、孔子は天下国家のレベルにまで拡張した人間として描かれている。（中略）孔子の「自己」は、己一個の身体的な実感のレベルを超えており、その意味で孔子は「私を去った」存在と言えよう。

*

ところで、孔子がこのような「自己」を獲得することが出来たのは、「学」によつてである。（中略）子路はその手順を形式主義として嫌い、容易に受け付けなかったのだが、根本的な部分では孔子と同じ考えを持っていたことは確かである。つまり、孔子も子路も「快」を行動の基準とする点では同じだが、それを感じる「自己」の大きさが違

うということなのである。^{注7}

山下によれば、孔子の中にも「私を去った」存在」としての「没利害性」と「快」を行動の基準とする点」があるが、孔子は「自己」を「天下国家のレベルにまで拡張した人間」なのであり、その「自己」の大きさが孔子と子路との「違い」になって現われているということになる。したがつて子路が「自己」を孔子にまで拡張したとしても、彼自身が「天下国家のレベルにまで拡張した人間」になれる訳ではなく、また「天下国家のレベルにまで拡張した人間」としての孔子が、「大きな子供」としての子路と同じレベルにまで「自己」を縮小することもないはずだ。この（七）の時点での子路と孔子の「師弟愛」のあり方は、子路にとつては常に「師の運命」のために「自己」を投げ出す覚悟を持ち続けることであり、それは「自己」を「天下国家のレベルにまで拡張」させるといふ師の方向性からは決定的にずれてしまっている。一方、孔子にとつても「全身的に孔子に凭り掛かつてゐる」子路の「大きな子供」としての「自己」を許容することは、本来の彼自身の教えからずれてしまっている。このような相対的な「違い」を抱え込んだ「師弟愛」こそが、「弟子」というテクストの特徴なのである。

この「違い」は、その後も（九）では孔子の側から「子路の中で相当敏腕な実務家と隣り合つて住んでゐる大きな子供」の存在に對する孔子の困惑（「可笑しくもあり、困りもするのである」）として描かれ、（十二）では子路の側から「明哲保身主義」と「身を捨てて義を成す」こととの対立として描かれてい

る。それでも子路の「自己」を投げ出す覚悟が孔子に向けられている限り、両者のバランスは保たれており、最終的に（十三）で語り手は、「孔子及びそれに従う自分等の運命の意味が判りかけて来たやうである」「朴直子路の方が、其の單純極まる師への愛情の故であらうか、却つて孔子といふものの大きな意味をつかみ得たやうである」と語っており、これが子路の「單純極まる師への愛情」の到達点であつた。

ではなぜ子路はその後、「夫子の為に生命を抛つて顧みぬのは誰よりも自分だ」と深く信じていたにもかかわらず、孔子以外の人物の為に生命を抛つことになつたのか。次章ではそのことを考えてみたい。

三、子路の死の意味——「狂狷」としての「自己」

（十二）で、陳の靈公を泄治という臣が諫めて殺されたといふ百年ばかり前の事件について、一人の弟子が孔子に「泄治の正諫して殺されたのは古の名臣比干の諫死と變る所が無い。仁と称して良いであらうか」と尋ねたところ、孔子は「身の程をも計らず、区々たる一身を以て一国の淫婚を正さうとした。自ら無駄に命を捐てたものだ。仁どころの騒ぎではない」と答えた。

この応答を傍で見ていた子路は、孔子に次のように尋ねる。

仁・不仁は暫く措く。しかし兎に角一身の危きを忘れて一國の紊亂を正さうとした事の中には、智不智を超えた立派

なものが在るのではなからうか。空しく命を捐つなどと言ひ切れないものが。仮令結果はどうあらうとも。

これに対して孔子は「由よ。汝には、さういふ小義の中にある見事さばかりが眼に付いて、それ以上は判らぬと見える」と答える。だが子路は納得せず、「一人の人間の出処進退の適不適の方が、天下蒼生の安危といふことよりも大切なのであらうか?」「無駄とは知りつつも諫死した方が、國民の氣風に与える影響から言つても遙かに意味があるのではないか」と反論する。「但、生命は道の為に捨てるとしても捨て時・捨て処がある。それを察するに智を以てするのは、別に私の利の為ではない。急いで死ぬるばかりが能ではないのだ」という孔子の答えに、「何処かしら明哲保身を最上智と考える傾向」を感じた子路は、「納得し難げな顔色で」立ち去る。孔子はその後姿を見送りながら、「邦に道有る時も直きこと矢の如し。道無き時も又矢の如し。あの男も衛の史魚の類だな。恐らく、尋常な死に方はしないであらう」と語る。

子路の立場は「仮令結果はどうあらうとも」とあるように、それが「無駄死」であるかどうかを問題としない。つまり「没利害的」であり、結果よりもその時に「一身の危きを忘れて一國の紊亂を正さうとした事」自体を評価するというのである。それはつまり、自分の中にある抑え切れない衝動に基づいて行動することの正当性を主張しているのだと言えよう（その意味でこれは（三）の「俺程強く怒りを感じやしないんだ」という思いと共通する）。

このエピソードの原典は『孔子家語』巻第五にある。原典では最初に泄治について尋ねたのは子貢になっており、この場面には子路は登場しない（子路を登場させたのは、後の衛における子路の死の伏線とするための創作である）。さらに原典において「狷と謂う可し」という孔子の言葉の部分が、「弟子」では「仁どころの騒ぎではない」と置き換えられている。

ここで（五）の「子路は師の教の中から、此の単純な倫理観を補強するやうなものばかりを選んで攝り入れる」として示されている孔子語録の中に、「狂者ハ進ンテ取り狷者ハ為サザル所アリ」という言葉が含まれていることに着目したい。「狷」とは「①気みじか。心がせまきびしい」「②かたく節義を守り、意を曲げては為さぬこと」「③ためらふ」「④とく跳ぶ」の意味があり、「狂狷」とは「徒らに理想に走つて実行が伴はず、思慮が乏しくかたくななこと。狂は志が極めて高く進取の気象に富むが行の疎略なこと。狷は知識の未だ及ばない所はあるが、守る所が堅固であり断固として不善を為さないこと」である。^{注8}これらの「狷」及び「狂狷」の説明は、子路の性質と重なるところが多い。志は極めて高いが「形からはひつて行くといふ筋道を容易に受けつけない」点で行いが疎略であり、また「気みじか」で「かたく節義を守り、意を曲げては為さぬ」点や、「知識の未だ及ばない所はあるが、守る所が堅固であり断固として不善を為さない」点などは、まさに子路その人の説明であるかのようである。

「論語」の中で孔子は「狂狷」について次のように語ってい

る（「狂者ハ進ンテ取り狷者ハ為サザル所アリ」の原典でもある）。

子曰はく、中行を得てこれに与せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は為さざる所あり。（先生がいわれた、「中庸の人をみつめて交われなすれば、せめては狂者か狷者だね。狂の人は（大志を抱いて）進んで求めるは、狷の人は（節義を守つて）しないことを残しているものだ。」^{注9}）

ここで孔子は「中庸に次ぐものとして、積極進取の「狂」とひきこみがちで慎重な「狷」とをあげる^{注10}」のだ。この「論語」での「狂狷」は子路のことを指しているのではないが、「弟子」というテクストの中での子路は、この「狂狷」としての性質を体现しているのではないか。^{注11}そうだとすれば、孔子が『孔子家語』の中で「狷と謂う可し」と評した泄治の行為に、子路が深く共感し、擁護したものも合点がいくだろう。子路は泄治の中に「狷者」としての「自己」を見出したのだ。「狂狷」とは、「中庸」に到達出来ない子路にとって唯一の実現可能なひとつの「自己」表現であり、（十六）での子路の壮絶な死は、（十二）で満足な答えの得られなかった孔子に、自分の身をもって「自己」の価値を問い直したことになる。

子路の死については多くの論者が「師の教え」との関係について論じている。奥野政元は前述のように「子路の死に様は一種無ばうな大死でもある」と述べ、「最も本質的な行為については師と逆行しながら、余計なところで師の説に従属して

いる^{註12}」とした。これに対して渡辺善雄は「冠を正して絶叫するのは、師に習って後世に義を示すためではなかったか。子路は孔子から学びとったものを、彼の流儀で実践したのである。無謀な犬死とは言えない^{註13}」と述べている。また、本田孔明は「子路と孔子との関係性」が「相対的な幻想の構造をとる」と述べた上で、「またこの関係は、子路の死に対してそれぞれ正反対の見方ができることもかかわっている。つまり彼の死は、己の信ずるものに殉じた、ヒロイックな終焉とも、師の教えに反し、己の愚かさから抜け出せなかった無意味な犬死にとも読めるのである^{註14}」と主張している。

だが、本論がこれまで明らかにしてきたように、「子路と孔子との関係性」は、その独特な「師弟愛」の要素を抜きにしては論じられないはずなのだ。前章で指摘した「違い」とは、孔子が「中庸」によって「自己」を「天下国家のレベルにまで拡張した人間」であるのに対して、子路は「自己」を「天下国家のレベルにまで拡張」できない人間であることを意味しており、その「中庸」に到達できない「偏り」こそが、「狂狷」としての「自己」なのである。孔子はその「没利害的」な「偏り」を、弟子としての子路の「欠点」であると同時に「無類の美点」として許容し、「子路の勇も政治的才幹も、此の珍しい愚かさ比べれば、ものの数ではない」として、深く愛していたのだ。

そうだとすれば、(十四)の冒頭で、

孔子が四度目に衛を訪れた時、若い衛侯や正卿孔叔圉等

から乞はれるままに、子路を推して此の国に仕へさせた。孔子が十余年ぶりで故国に聘へらえた時も、子路は別れて衛に留まつたのである。

と語られているように、自分から子路を引き離し、孔叔圉に仕えるように推薦した時、孔子は既に結末での「柴(子羔)や其れ帰らん。由や死なん」という子路の死を予言した時と、同じ思いを抱いていたかもしれないのだ。すなわち、「十年来、衛は南子夫人の乱行を中心に、絶へず紛争を重ねてゐた」のだから、その紛争に子路がいつ巻き込まれるかも知れず、巻き込まれた時には主人である孔叔圉(あるいはその一子慳)のために自分の生命など惜しまない子路であることは、最初から孔子にはよくわかっていたはずなのだ。孔子が推挙しなければ、子路は孔子と共に魯の国において、衛の政変には関与しなかったであろうし、孔慳のために生命を捧げることもなかったに違いない。

孔子は(十二)の時点で子路が「恐らく、尋常な死に方はないであらう」と覚悟していた。つまり子路の「狂狷」としての「自己」を、最も理解していたのは孔子だった。その「狂狷」としての「自己」を全うさせるために、孔子は子路を自分から解放し、衛の地に留まらせたものではなかったか。それはおそらく、五十歳を過ぎて「既に堂々たる一家の風格を備へて来た」この愛弟子を、「生涯孔子の番犬」として終わらせることを惜しんだのであろう。

その結果として、子路は師の教えに従って衛の蒲の地を見事

に治め、予想通り政変に巻き込まれて「全身膾の如くに切り刻まれて」死ぬ。死の直前まで彼は「孔門の徒」であり続けたのであり、同時に「狂狷」としての「自己」の死に様を、かつて泄治を評価しなかった師への問いかけとして突きつけたのだ。孔子は遠く離れた魯の地でそれを受けとめ、「佇立瞑目すること暫し、やがて潸然として涙下つた」とあるように、何も語らない。「爾後、醢は一切食膳に上さなかつた」エピソードが語られるだけである。だがその心の中では、子路の死を泄治と同じように「自ら無駄に命を捐てたもの」とは評価しなかつたであろう。たとえ孔子の理念における評価がそうだとしても、そこには同時に「師弟愛」が存在するのであり、その「師弟愛」が孔子をして子路を衛へと向かわせ、「没利害性」の「美しさ」を存分に発揮させたのであるから。

注

- 1 『中島敦全集1』筑摩書房、二〇〇一（平成二三）・一
〇、「解題」（川村湊）より。

- 2 篠田一士『弟子』をめぐって（『近代文学鑑賞講座』
第一八巻、角川書店、一九五九（昭和三四）・一二、所
収）。引用は鷺只雄編『中島敦・叢書現代作家の世界
5』文泉堂出版、一九七七（昭和五二）・四、より。

- 3 勝又浩は「李陵」の構図（『日本文学』一九七一（昭
和四六）・三）の中で、次のように述べている。（引用は
『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島敦』有精

堂、一九七八（昭和五三）・二、より）

いくどかの繰り返しを許してもらうならば、「弟子」という作品が子路伝ではなくして、まさに「弟子」とされなければならなかつた根拠、つまり、子路と孔子という取り組みが単に行動人とか認識者とかの人間タイプや典型それ自身を描くための人物対置であつたのではなくして、彼ら、全く異質な存在が互に反撥し合い惹き合いつつ、しかもそうしたそれぞれの宿命の交錯を通して反つて結果的に相互の存在をより活かし合っているその関係、そして、その美しい一組の関係がそのまま彼らの一団と社会との隔絶と繋着とを象徴するという関係、そうした作品世界の特異な構造を、私は何よりも強調しておきたかつたのである。だから私は、「弟子」そして「李陵」の主人公とは、彼らのうちのどの人物でもなく、実は彼らによって織りなされるこの対比的関係性こそが真の主人公なのだ、と言つてもよいとさえ考えているのである。

- 4 本田孔明「中島敦『弟子』論——もう一つの「歴史」小説のために——」（『立教大学日本文学』七三号、一九九四（平成六）・一二）

- 5 注4に同じ。

- 6 奥野政元『中島敦論考』桜楓社、一九八五（昭和六〇）・四、「第十二章『弟子』——他者との出会い」よ

り。

7

山下真史「中島敦『弟子』論」(『中央大学文学部紀要』通巻第一九九号、二〇〇四(平成一六)・三)

8

諸橋轍次『大漢和辞典』巻七 修訂版、大修館書店、一九八五(昭和六〇)・四、より。漢字は新字体に改めた。

9

金谷治訳注『論語』岩波文庫、一九六三(昭和三八)・七、「巻第七 子路第十三」より。

10

注9に同じ。

11

「積極進取の「狂」とひきこみがちで慎重な「狷」とあるように、「狂」と「狷」とは対照的で必ずしも一致しないが、子路は「狷」がその性質の中心になっているものの、「狂」の要素も含んでおり、それによって「狷」一辺倒ではない、より魅力的な人物として描かれている。

12

注6に同じ。

13

渡辺善雄『『弟子』ノート(下)』(『月刊国語教育』一五巻六号、一九九五(平成七)・八)

14

注4に同じ。

※

「弟子」本文の引用は『中島敦全集1』筑摩書房、二〇〇一(平成一二)・一〇、に拠り、漢字は新字体に改め、ルビは省略した。

※

本稿は、二〇〇四(平成一六)年七月一〇日に行われた、「国文学 言語と文芸の会」七月例会(於早稲田大

学)での口頭発表をもとに執筆したものです。当日会場にて貴重なご指摘、ご質問を頂いた方々に感謝致します。